

タイ語の他動性に関する先行研究： Kul Iavani jaya1974とThepkanjana1992の比較

著者名(日)	高橋 清子
雑誌名	神田外語大学紀要
巻	23
ページ	293-313
発行年	2011-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000595/

タイ語の他動性に関する先行研究： Kullavanijaya 1974 と Thepkanjana 1992 の比較

高橋清子

1. はじめに

タイ語の他動性に関する先行研究¹は多いが、紙幅が限られている本稿ではそのすべてを概観することは不可能であり、代表的研究に焦点を絞って概観せざるを得ない。タイ語の他動詞の体系的分類を目指した Kullavanijaya 1974 と Thepkanjana 1992 がその代表的研究にあたると筆者は考える。両研究に共通しているのは、必要十分とそれぞれが想定する分類素性を用いてタイ語の他動詞を包括的に分類しようと試みていることである。本稿では、両研究を比較することによって、タイ語における他動性という概念はどのように分析可能であるのかを探ることとする。

2. Kullavanijaya 1974 の分類

Kullavanijaya 1974 は、他動詞を「主格 nominative 形式（動詞の前に生起する主語名詞句）の生起を許す動詞²で、かつ、その主格形式の格関係（意味役割）が目的格 objective（動詞が表す活動や状態によって影響を受けるもの）ではない動詞³」と定義し、以下のように他動詞の格形式（主語名詞句、目的語名詞句、前置詞句）⁴の格関係について説明する。タイ語のすべての動詞は

¹ 例えば、Indrambarya 1994: 93-98、Iwasaki & Ingkaphirom 2005: 109-121、峰岸 2007、メータピスイット 2000、Punyodyana 1976: 73-77、坂本 1985、Thepkanjana 2000、Thepkanjana 2003、など。

² 主格形式の生起を許さないのは存在動詞である。

³ 主格形式が目的格であるのは自動詞である。

⁴ ただしタイ語動詞の格形式の生起は必須ではないとする。

目的格の格形式をとり得るが、他動詞の場合、目的格となり得るのは主格形式ではなく対格 *accusative* 形式（動詞の後ろに生起する直接目的語名詞句）である。一方、他動詞の主格形式は、動作主格 *agentive*（典型的には動詞が表す動作を行う有生物）、与格 *dative*（動詞が表す状態や活動によって影響を被る有生物、あるいは、積極的参与者として影響を被ることがない活動に参与しているもの）、道具格 *instrumental*（動詞が表す活動や状態の生起に関与している有生物の力あるいは物体）のいずれかである。

Kullavanijaya 1974 による分類の骨子は以下のとおりである。「格素性（動作主格、目的格、道具格、与格、恩恵格 *benefactive*、共同格 *comitative*、様態格 *manner*、時間格 *time*、場所格 *locative* など）」、「派生特徴（“開く→開ける”などの他動詞化や“開ける→簡単に開く”などの自動詞化、受動構文）」、「共起可能な補語（*វា* 前置詞句、*វិ* 名詞句、補文）」という3つの基本的分類基準を用い、さらに「受影性 *affected*（異なる受動構文）」、「事実性 *factive*（行為の結果、何かが生まれるという受影性の下位分類）」、「情報性 *information*（異なる補語）」、「始動性 *initiating*（使役性に関わる情報性の下位分類）」、「使役性 *causative*（目的を表す補文）」、「場所性 *location*（場所を表す項名詞句）」などの示唆的な（階層的）意味特徴および様々な統語特徴⁵を考慮することによって、タイ語の他動詞を24のタイプに分類した。

まず主格形式の格関係によって大きく「(1) 動作主格タイプ」、「(2) 与格タイプ」、「(3) 道具格タイプ」に分類し、それぞれを以下のように下位分類した。

(1) 動作主格タイプ

1-1 「始動性、情報性」を持つ複他動詞

伝える *บอก*、教える *สอน*、紹介する *แนะนำ*、忠告する *เตือน*、命令する *สั่ง*、
誘う *เชิญ*、欺く *หลอก*

⁵ 本稿では、紙幅の関係で、各タイプの他動詞の統語的振舞いに関する説明を割愛する。

1-2 「非始動性、情報性」を持つ複他動詞

尋ねる ถาม、答える ตอบ、説明する อธิบาย、呟く พิมพ์、語る เล่า、愚痴を
言う บ่น、罵る ต่ำ、囁く กระซิบ、講義する บรรยาย、白状する สารภาพ、審
問する สอบสวน、褒める ชม、言う ว่า、告げ知らせる แจ้ง、反論するเถียง、
批判する วิจาร、申し上げる เรียง、説明する ชี้แจง

1-3 「非情報性」を持つ複他動詞

与える ให้、預けるฝาก、借りる ยืม、買う ซื้อ、送る ส่ง、売る ขาย、配る แจก、
献じる ถวาย

1-4 「厳密な場所性」を持つ動作主格他動詞

入れる ใส่、足す เติม

1-5 「情報性、事実性、非厳密な場所性」を持つ動作主格他動詞

書く เขียน、印刷する พิมพ์

1-6 「非情報性、事実性、非厳密な場所性」を持つ動作主格他動詞

描く วาด、線を引く ชีต、起草する ร่าง、塗りつける แต่ง、刺青をする สัก

1-7 「非事実性、非厳密な場所性」を持つ動作主格他動詞

煮る ต้ม、揚げる ทอด、浸ける แช่、詰める บรรจุ、閉じ込める ชัง

1-8 「情報性、非受影性、非厳密な場所性」を持つ動作主格他動詞

書き留める จด、書き加える เติม

1-9 「非情報性、非受影性、非厳密な場所性」を持つ動作主格他動詞

置く วาง、手で探る ล้วง、付ける ติด、掛けるแขวน、しまい込む เก็บ、塗る ทา

1-10 「情報性、事実性、非場所性」を持つ動作主格他動詞

著述する แต่ง、歌う ร้อง

1-11 「非情報性、事実性、非場所性」を持つ動作主格他動詞

縫う เย็บ、籠などを編む ถัก、レースなどを編む สาน、作る ทำ、仕立てる ตัด、
引き起こす ก่อ、創る สร้าง、織る ทอ、鑄造する หล่อ

1-12 「使役性、受影性、非場所性」を持つ動作主格他動詞

させる ให้、使う ใช้、欺く หลอก、呪文をかける เสก、頼む วาน

1-13 「非使役性、受影性、非場所性」を持つ動作主格他動詞

殺す ฆ่า、蹴る เตะ、破く ฉีก、叩く ตี、撃つ ยิง、燃やす เผา、突き刺す แทง、殴る ชก、捉える จับ、酷く傷つける ทำร้าย、質に入れる จำนำ、打ち込む ตอก、刺す ตำ、探す ค้น、こじ開ける แงะ、掘り起こす ขุด、切る ตัด、武器を押しつけて強盗する 搶、差し込む เสียบ、盗む ลัก、えぐり取る เจียน、断ち割る ผ่า、斬る ฟัน、解体する รื้อ、引き抜く ถอน、ぶつかる ชน、爆発する ระเบิด、噛む กัด、上から叩きつける ทุบ、攻撃する โจมตี、侵攻する รุกราน、手で押しやる ผลัก、倒す ล้ม、平定するปราบ、火にあぶる ย่าง

1-14 「情報性、非受影性、非場所性」を持つ動作主格他動詞

読む อ่าน、始める เริ่ม、挨拶する ทักทาย、推測する เดา、慰める ปลอบ、決心する ตัดสิน、暗誦するท่อง、呼ぶ เรียก

1-15 「使役性、始動性、非情報性、非受影性、非場所性」を持つ動作主格他動詞

告げる บอก、紹介する แนะนำ、命令する สั่ง、忠告する เตือน

1-16 「非使役性、始動性、非情報性、非受影性、非場所性」を持つ動作主格他動詞

使う ใช้、解き放す ปล่อย

1-17 「非始動性、非情報性、非受影性、非場所性」を持つ動作主格他動詞

集め合わせる รวม、支援する สนับสนุน、布を洗う ซัก、選ぶ เลือก、布、髪以外のものを洗う ล้าง、引いて連れて行く จูง、開ける เปิด、受ける รับ、掃く กวาด、取る เอา、手に持つ ถือ、面倒をみる ดูแล、養う เลี้ยง、導く นำ、差し出す ยื่น、保護する รักษา、助ける ช่วย、包む คลุม、すする จิบ、消す ดับ、着用する สวม、口に入れて食べさせてやる ป้อน、注ぐ ริน、こりを揉みほぐす นวด、掲げる ชู、修理する ซ่อมแซม、見る มอง、聞く ฟัง、遊ぶ เล่น、計る วัด、歓迎する ต้อนรับ、守る ป้องกัน

(2) 与格タイプ

2-1 「所有性」を持つ与格他動詞

所有する มี

2-2 「非所有性、知覚性」を持つ与格他動詞

見える เห็น、聞こえる ได้ยิน

2-3 「非所有性、非知覚性、感情性」を持つ与格他動詞

愛する รัก、好む ชอบ、惜しむ เสียหาย、飽きる เบื่อ、憎悪する เกลียด、同情
する เห็นใจ、耽溺する หลง、嫌う รังเกียจ

2-4 「非所有性、非知覚性、非感情性、認知性」を持つ与格他動詞

知っている รู้、忘れる ลืม、恐れる กลัว、知っている ทราบ、覚える จำ、心
配する ห่วง、考える คิด、疑う สงสัย、興味を持つ สนใจ、信じる เชื่อ

(3) 道具格タイプ

3-1 「受影性、事実性」を持つ道具格他動詞

書く เขียน、創る สร้าง、縫う เย็บ、編む สาน、印刷する พิมพ์

3-2 「受影性、非事実性、負傷性」を持つ道具格他動詞

傷つける บาด、斬る ฟัน、突き刺す แทง、撃つ ยิง、切る ตัด、抉り取る ฉีก、
切り刻む หั่น

3-3 「受影性、非事実性、非負傷性」を持つ道具格他動詞

燃やす ไหม้、焼き殺す ตลอก、水没させる ท่วม、汚す เปื้อน、吹きつける พัด

3. Thepkanjana 1992 の分類

Thepkanjana 1992 は、「直接目的語の生起が義務的かどうか」という統語的
基準⁶と「他動性が高いかどうか」という意味的基準によってタイ語の動詞を

⁶ しかし Thepkanjana 自身も認めているように、タイ語動詞の項名詞句の生起は必須ではない (cf. 注4)。しかしながら「統語的他動性」の特徴として「直接目的語が義務的に生起す

分類し、他動性の高い典型的な他動詞から他動性の低い典型的な自動詞までいくつかの連続的な動詞カテゴリーを提示した。他動性の程度を計る物差しとしては、「動詞が表す事象に2つのものが参与する 2 participants」、「行為者が意図した対象物 target」、「行為者の意志性 volition」、「具象物に対する物理的操作 physical manipulation」、「行為者の行為によって対象物が被る顕著な影響 obvious effect on the target」という5つの他動性因子を採用した。このように Thepkanjana 1992 の研究の目的は、タイ語動詞の他動性の連続体（自動詞と他動詞の連続性）を明らかにすることにあるのだが、本稿では自動詞の分類については取り上げず、他動詞の分類についてのみ取り上げる。

Thepkanjana 1992 によると、タイ語の他動詞は以下のような階層的意味特徴を持つという。

- | |
|--|
| <p>(1) 行為者が意図した対象物を表す直接目的語を伴う他動詞</p> <p>1.1 その対象物の存在が前提とされていない（行為の結果、存在するようになる）</p> <p>1.2 その対象物の存在が前提とされている（行為の結果、影響を被る）</p> <p> 1.2.1 その対象物は高い影響を被る</p> <p> 1.2.2 その対象物はやや高い影響を被る</p> <p> 1.2.3 その対象物は低い影響を被る</p> <p>(2) 行為者が意図した対象物ではないもの（事象に間接的に参与し、その事象の範囲を特定するもの）を表す直接目的語を伴う他動詞</p> |
|--|

Thepkanjana 1992 のタイ語の他動詞の分類の全体像は表1のとおりである。

ること obligatory presence of a DO」(p. 320) を挙げている。論考の中で明示的に説明されていないが、おそらく「典型的他動詞の直接目的語は動詞の直後に生起することが普通であり、理想的には統語的必須要素と認められるが、ある種の語用論的要因によって生起しなくてもよい場合がある」と考えているということであろう。彼女によれば、「後ろに名詞句が続き得るか」あるいは「後ろに何 อะไร や誰 ใคร という疑問詞を添えたときに意味が通じ、その質問に答えられるか」といったテストによって他動詞かどうかを判定することができるという。

表 1：Thepkanjana 1992 のタイ語の他動詞の分類（他動性の程度）

<p>(1)直接目的語の生起が義務的である典型的な他動詞 「創る สร้าง、注ぐ ริน、持ち上げる ยก、叩く ตี」 など</p>	<p>[+ 2 participants] [+ target] [+ volition] [+ physical manipulation] [+ obvious effect on the target]</p>
<p>(2)直接目的語が生起しないことを許す非典型的な他動詞 「(友人を) 助ける ช่วย、(私を) いじめる รังแก、(学校に) 行く ไป、(顔を) 背ける เมิน」 など</p>	<p>[+ 2 participants] [± target] [+ volition] [± physical manipulation] [± obvious effect on the target]</p>
<p>(3)直接目的語が生起してもしなくてもよい典型的な自・他動詞 「(答えを) 熟考する ใคร่ครวญ、(速いテンポで) 跳ねる เต้น」 など</p>	<p>[± 2 participants] [- target] [+ volition] [- physical manipulation] [- obvious effect on the target]</p>
<p>(4)直接目的語が生起することを許す非典型的な自動詞（非典型的な他動詞） 「(私を) 羨む อิจฉา、(道路を) 水没させる ท่วม、(汗で) 湿る ชุ่ม、(足が) 痒い คัน、(椅子に) 座る นั่ง」 など</p>	<p>[± 2 participants] [- target] [- volition] [- physical manipulation] [- obvious effect on the target]</p>

最上段のもっとも他動性が高い(1)の他動詞では5つのすべての因子の値が正だが、最下段のもっとも他動性が低い(4)の他動詞では「2つの事象参与者」という1つの因子の値が正であり得るだけで、残り4つの因子の値はすべて負である。

それぞれのカテゴリー成員の具体例を以下に挙げる。

(1) 直接目的語の生起が義務的である典型的な他動詞

1-1 対象物の存在を前提としない（創出する）タイプ

創る สร้าง、著述する แต่ง、引き起こす ก่อ

1-2 対象物が高い影響を被るタイプ

草を刈る ดาย、注ぐ ริน、殴る ต่อย、持ち上げる ยก、叩く ตี、吸う สูบ

(2) 直接目的語が生起しないことを許す非典型的な他動詞

2-1 対象物がやや高い影響を被るタイプ

(友人を) 助ける ช่วย、(我々を) 恐喝する คุกคาม、(私を) いじめる รังแก、
(彼に) 復讐する แก้แค้น、抑圧する กดขี่、騙す โกง、後援する อุปถัมภ์、利
益の材料になるお人好しを騙す ต้ม、迫害する รังควาน

2-2 対象物が低い影響を被るタイプ

(学校に) 来る มา、(観客に) お辞儀する ไถ้、(彼を) 聞く ฟัง、戻る กลับ、
罵る ต่ำ、よじ登る・よじ降りる ปีน、愚痴を言う บ่น、吠える เห่า、行く ไป、
もてなす ปรับนั้ดี、挨拶する ทักทาย

2-3 身体部位が変化を受けるタイプ

(顔を) 振り向かせる เหลียว、(身体を) ねじる เอี้ยว、(手を) 振る โบก、
(顔を) 背ける เมิน、(顔を) うなずかせる พยัก、(顔を) あげる เงย、(顔
を) 伏せる ก้ม、(身体を) 曲げる โค้ม

(3) 直接目的語が生起してもしなくてもよい典型的な自・他動詞（自・他動詞の直接目的語が表すものは、動詞が表す事象に本来的に参与するものではなく間接的に参与して、いわばその事象の範囲を特定するといえるもの）

(答えを) 熟考する ไกรรครวญ、(お金で) 不正を行う ทจริต、(速いテンポで) 跳ねる เต้น

(4) 直接目的語が生起することを許す非典型的な自動詞（非典型的な他動詞）

4-1 刺激によって起こる心理作用・心理状態タイプ

(私を) 羨む อิจฉา、(彼を) 疑う สงสัย、(あなたに) 夢中になる ค้าง

4-2 場所を必要とする無生物の物理作用・物理状態タイプ

(道路を) 水没させる ท่วม、(家中に) 散らばる เกือบ

4-3 二次的な物質を必要とする無生物の物理作用・物理状態タイプ

(泥で) ぐちゃぐちゃになる เอะอะ、(汗で) 湿る ชุ่ม、(水で) 濡れる เปียก

4-4 身体部位と刺激によって起こる物理作用・物理状態タイプ

(足が) 痒い คัน、(背中が) 痛む ปวด、(水に) 飢える กระจาย、(ご飯で)
満腹になる อิ่ม、(食事を) 嘔吐する สำรอก、(船に) 酔う เมา

4-5 身体部位と接触するものを必要とする身体動作・姿勢タイプ

(椅子に) 座る นั่ง、(ベッドに) 寝る นอน、(道路を) 歩く เดิน

4. 両者の比較

Kullavanijaya 1974 による分類 (第 2 節) と Thepkanjana 1992 による分類 (第 3 節) には、分析の枠組みや研究目的に関して、以下のような違いが見られる。

- (1) 前者は、広い意味での格文法の枠組みを使い、他動詞と共起可能な項名詞句および前置詞句の格関係の解明を主な目的としたのに対し、後者は、プロトタイプの見方を取り、「典型的他動詞、非典型的他動詞、典型的自・他動詞、非典型的自動詞、典型的自動詞」という連続した動詞カテゴリーを成り立たせている他動性因子を同定することによって体系的な分類を目指した。
- (2) 前者は、いわば先験的に他動詞を定義して他動詞の資格を限定した上で、それに当てはまる動詞を対象にその統語特徴や意味特徴を調べ、下位分類していった。まず他動詞の主語の意味役割を規定し、その上で主語と目的語の意味役割の整合性 (共起関係) を調べた。それに対し、後者は、主語

の意味役割については明示的に言及せず⁷、専ら直接目的語の生起の可能性に注目した。格関係はどうであれ、直接目的語をとり得る動詞を分析データとして広く浅く集め、直接目的語の生起が義務的かどうか（逆に、生起しなくともよいかどうか）を調べた。そして、その統語現象（直接目的語の有無）と他動性因子の値がどう関連しているのかを探った。

(3) 前者は、項名詞句だけでなく前置詞句や補語との共起関係や他の構文との派生関係など、他動詞の統語的な振舞いにも着目して他動詞の体系的分類を試みた。24もの細かいタイプ分けは多くの統語現象を考慮した結果である。しかし後者は、直接目的語を取るかどうかを検討したことがかろうじて統語的分析にあたるものの、統語面には深入りせず、主に動詞の語彙的意味を分析対象とした。具体的には、動詞（を核とする節）が表す事象の他動性をゲシュタルトとして捉え、他動性には5つの異なる因子が関わっていると見て、それらの因子の変数値を考察することによってそれぞれの動詞の他動性の高低を説明しようとした。

(4) 前者は、複他動詞（直接目的語と間接目的語の両方を同時にとり得る他動詞）を含む典型的他動詞（他動性の高い他動詞）を中心に考察したのに対し、後者は、典型的他動詞よりもむしろ非典型的他動詞（2つの事象参加者を項名詞句の形で同時に表示し得る動詞、他動性の低い他動詞）のバリエーションに関心を寄せた。

両研究で採用されている分類素性がお互いどのような対応関係にあるのかを表2にまとめた。

⁷ 「意志性」、「物理的操作」という他動性因子が正の値か負の値かに言及することによって主語の意味役割の特徴を暗示している。

タイ語の他動性に関する先行研究：Kullavanijaya 1974と
Thepkanjana 1992の比較

表 2：Kullavanijaya 1974 の分類素性と Thepkanjana 1992 の分類素性の比較⁸

Kullavanijaya 1974 の分類素性	Thepkanjana 1992 の分類素性
「受影性 affected」	「行為者の行為によって対象物が被る
「事実性 factitive」	顕著な影響 obvious effect on the target 」
「情報性 information」	対象物の存在が前提とされておらず、
「始動性 initiating」	行為の結果、存在するようになる
「使役性 causative」	×
「場所性 location」	×
「所有性 possession」	×
「知覚性 perception」	場所を必要とする無生物の物理作用・物理状態
「感情性 emotion」	×
「負傷性 wound」	刺激によって起こる心理作用
× (主格形式が「動作主格、与格、道具格」で対格形式が「目的格」など)	刺激によって起こる心理状態
× (主格形式が「動作主格」で対格形式が「目的格」)	×
× (主格形式が「動作主格」)	「動詞が表す事象に 2 つのものが参与する 2 participants」
× (主格形式が「動作主格」で対格形式が「目的格」)	「行為者が意図した対象物 target 」
	「行為者の意志性 volition 」
	「具象物に対する物理的操作 physical manipulation 」

⁸ 表の中の「×」の記号は、対応する分類素性を使っていない、あるいは明示的に分類素性として言及されていないことを意味する。また、この表では階層関係を成す分類素性もすべて同列に挙げた。

Kullavanijaya 1974 は「受影性、事実性、情報性、始動性、使役性、場所性、所有性、知覚性、感情性、負傷性」といった細かい分類素性を使ってタイ語の他動詞を 24 の異なるタイプに分けた (第 2 節)。一方、それほど細かい分類素性を使っていない Thepkanjana 1992 はその半分以上の 11 のタイプに分類した (第 3 節)。

タイ語の他動詞の分類素性に関する Kullavanijaya 1974 の考えと Thepkanjana 1992 の考えに見られる第一の大きな相違点は、意志性を他動詞の基本的意味要素 (他動詞の分類に必要な分類素性) と見ているかどうかである。Kullavanijaya 1974 は、意志性が全く関与しない与格や意志性が直接的には関与しない道具格を主語とする他動詞を (意志性が関与する動作主格を主語とする他動詞と同等の) 他動詞の主要タイプとして分類している。このことから Kullavanijaya 1974 は意志性をタイ語の他動詞が持つ基本的意味要素であるとは考えていないことがわかる。一方 Thepkanjana 1992 は、主要な他動性因子の一つとして意志性を挙げ、有情者としての人間や無生物を主語にとる他動詞は他動性の程度が低い非典型的な他動詞であるとする。つまり Thepkanjana 1992 は意志性をタイ語の他動詞の基本的意味要素 (典型的他動詞に必須の意味要素) であると見ている。なぜ Thepkanjana 1992 が意志性を重要視するかと言えば、Thepkanjana 1992 はプロトタイプ理論の枠組みで他動性を分析した先行研究 (cf. Lakoff 1977, Hopper & Thompson 1980, Taylor 1989/1995) の分析の仕方を踏襲し、特に Lakoff 1977 で提案されている (意志性を含む) 他動性因子の内容を基本的にそのまま流用してタイ語の他動詞の分析の道具として用いているからである。その意味では、Thepkanjana 1992 は既存の理論を教条主義的に信じ、その理論に頼ってタイ語の言語現象を分析していると言える。むしろ Kullavanijaya 1974 のほうが既存の理論の枠組みを使いながらもタイ語の言語事実に寄り添ってそのありのままの特徴を記述すべく試行錯誤の分析を心がけたと言えるかもしれない。

第二の大きな相違点は、人間主語（動作主格主語、与格主語）以外の主語をとる他動詞の分類素性の詳細度とそうした他動詞の例示化の丁寧さの度合いについてである。Kullavanijaya 1974 は、動作主格、与格、道具格の主語をとる他動詞タイプを3つの主要な他動詞タイプとして認め、それらの下位分類についてそれぞれ相当数の具体的語彙項目を挙げている。一方 Thepkanjana 1992 は、全般的に具体例に乏しく、特に道具格の主語をとる他動詞については、「4-2 場所を必要とする無生物の物理作用・物理状態タイプ」の2つの例を挙げているだけである（（水がどこかを）水没させる ท่วม、（何かがどこかに）散らばる เกือบ）。Kullavanijaya 1974 が挙げている「（火が）燃やす ไหม้、（釘が）刺す ต้ม」などの道具格主語の他動詞については言及がない。⁹ 意志性の有無を主な分類基準とする Thepkanjana 1992 の分析では、人間の意志的行為が関与しないにもかかわらず対象物が顕著な影響を被る事象を表す「（火が）燃やす ไหม้、（釘が）刺す ต้ม」などの道具格主語の他動詞について、その他動性の程度をどう考えたらよいのか、答えを出しにくいのかかもしれない。

第三の大きな相違点は、与格の主語をとる他動詞の分類のあり方についてである。Kullavanijaya 1974 は、与格主語の他動詞をその統語特徴と意味特徴から、所有タイプ（「所有する มี」）¹⁰、知覚タイプ（「見える เห็น、聞こえる ได้ยิน」）、感情タイプ（「愛する รัก」など）、認知タイプ（「理解する เข้าใจ」など）という4つのタイプに言及し、それぞれ例を挙げている。一方 Thepkanjana 1992

⁹ Kullavanijaya 1974 は、「書く เขียน、創る สร้าง、縫う เย็บ、編む สาน、印刷する พิมพ์、傷つける บาดเจ็บ、斬る ฟัน、突き刺す แทง、撃つ ยิง、切る ตัด、挟り取る เจียน、切り刻む หั่น、搗く ต้ม」などの動詞は動作主格主語だけでなく道具格主語も容認する（人間の意志性が直接関与しない事象を表すこともある）と指摘しているが、Thepkanjana 1992 は、「創る สร้าง」について、他の動作主格主語の動詞と一律に[+volition]の特徴を持つ動詞であるとする。

¹⁰ タイ語には存在動詞と所有動詞の2つの意味機能を持つ動詞「（ある場所に何かが）ある、（誰かが何かを）所有する มี」がある。Kullavanijaya 1974 は、存在動詞「ある มี」を主語のない動詞として分類し、所有動詞「所有する มี」を与格の主語をとる他動詞の1タイプとして分類している。Thepkanjana 1992 は、存在動詞にも所有動詞にも言及せず、動詞「ある、所有する มี」をどの動詞カテゴリーにも挙げていない。

は、前者2つのタイプの動詞には言及せず、後者2つのタイプに相当する動詞についてのみ、いくつか例を挙げている（4-1 刺激によって起こる心理作用・心理状態タイプの「羨む อิจฉา、疑う สงสัย、夢中になる ถลึง」と、3 直接目的語の指示物が当該事象に間接的に関与しその事象の範囲を特定するタイプの「熟考する ไตร่ตรอง」）。与格主語の他動詞も、道具格主語の他動詞と同様、その他動性の高低をどう精密に計ったらよいか、答えを出しにくいのであろう。

一方で、Kullavanijaya 1974 と Thepkanjana 1992 には興味深い共通点もある。それは、どちらも「事実性（行為の結果、何かが生まれるという受影性の下位分類）」（Kullavanijaya 1974）すなわち「行為者の意図する対象物の存在が前提とされておらず、行為の結果、存在するようになること」（Thepkanjana 1992）を表す他動詞（「創る สร้าง、著述する แต่ง」など）を1つの特徴的な他動詞タイプとして分類し、そのような「行為の結果、何かが生まれることを表す創出動詞 creative verbs」は「行為の結果、何かに高い影響を及ぼすことを表す動詞」（「叩く ตี、殺す ฆ่า」など）と同じように他動性の高い典型的他動詞であると見ていることである。

Thepkanjana 1992 が提示した他動詞タイプを Kullavanijaya 1974 が他動詞として認定しているかどうか、その対応関係を表3にまとめた。

表3：Thepkanjana 1992 の他動詞タイプと Kullavanijaya 1974 の他動詞認定

Thepkanjana 1992 の他動詞タイプ	Kullavanijaya 1974 の他動詞認定
1-1 対象物の存在を前提としない（「創る สร้าง」など）	他動詞
1-2 対象物が高い影響を被る（「殺す ฆ่า」など）	他動詞
2-1 対象物がやや高い影響を被る（「助ける ช่วย、い	他動詞

タイ語の他動性に関する先行研究：Kullavanijaya 1974と
Thepkanjana 1992の比較

<p>じめる รั้งแรก」など)</p> <p>2-2 対象物が低い影響を被る(「(学校に) 行く ไป、(観客に) お辞儀する ไถ้」など)</p> <p>2-3 身体部位が変化を受ける(「(手を) 振る โบก」など)</p> <p>3 直接目的語の指示物が、行為者が意図した対象物ではなく、当該事象に間接的に関与し、その事象の範囲を特定するもの(「(速いテンポで) 跳ねる เต้น」など)</p> <p>4-1 刺激によって起こる心理作用・心理状態(「(私を) 羨む อิจฉา」など)</p> <p>4-2 場所を必要とする無生物の物理作用・物理状態(「(道路を) 水没させる ท่วม」など)</p> <p>4-3 二次的な物質を必要とする無生物の物理作用・物理状態(「(汗で) 湿る ชุ่ม」など)</p> <p>4-4 身体部位と刺激によって起こる物理作用・物理状態(「(足が) 痒い คัน」など)</p> <p>4-5 身体部位と接触するものを必要とする身体動作・姿勢(「(椅子に) 座る นั่ง、(道路を) 歩く เดิน」など)</p>	<p>他動詞ではない</p> <p>他動詞ではない</p> <p>他動詞ではない</p> <p>他動詞</p> <p>他動詞</p> <p>他動詞ではない</p> <p>他動詞ではない</p> <p>他動詞ではない</p>
---	---

表3から次のことが読み取れる。

- (1) Thepkanjana 1992 が「(2) 直接目的語が生起しないことを許す非典型的な他動詞」に分類している「2-2 対象物が低い影響を被ること」を表す「(学校に) 行く ไป」などの動詞や「2-3 身体部位が変化を受けること」を表す「(顔を) 背ける เหนิน」などの動詞を、Kullavanijaya 1974 は他動詞であると認めていない。

- (2) Thepkanjana 1992 が「(3) 直接目的語が生起してもしなくてもよい典型的な自・他動詞」に分類している「(速いテンポで) 跳ねる **เต็น**」などの動詞を、Kullavanijaya 1974 は他動詞であると認めていない。
- (3) Thepkanjana 1992 が「(4) 直接目的語が生起することを許す非典型的な自動詞（非典型的な他動詞）」に分類している「4-3 二次的な物質を必要とする無生物の物理作用・物理状態」を表す「(汗で) 湿る **ซม**」などの動詞、「4-4 身体部位と刺激によって起こる物理作用・物理状態」を表す「(足が) 痒い **คัน**」などの動詞、「4-5 身体部位と接触するものを必要とする身体動作・姿勢」を表す「(椅子に) 座る **นั่ง**」などの動詞を、Kullavanijaya 1974 は他動詞であると認めていない。

動作主格、与格、道具格以外の格の名詞句を主語にとる動詞は Kullavanijaya 1974 の他動詞の定義（第2節）から外れていることを思い出してほしい。Kullavanijaya 1974 によれば、「行く **ไป**、顔を背ける **เมิน**、跳ねる **เต็น**、歩く **เดิน**、湿る **ซม**、痒い **คัน**、座る **นั่ง**」などの動詞は目的格（動詞が表す活動や状態によって影響を受けるもの）の主語をとる動詞であり、そのため「滴る **หยด**、立ち上がる **ลุก**、立っている **ยืน**、躓いて転ぶ **หกล้ม**、眠る **หลับ**、咳をする **ไอ**」などと同じ自動詞に分類される。

5. まとめ

Kullavanijaya 1974 は、「タイ語の動詞には必須項がない」という事実を素直に受け入れ、項名詞句が実際に生起するのかどうかは問題とせず、あくまでも生起可能な項名詞句や前置詞句の格関係のあり方を主軸に、他動詞の統語的振舞いにも注意しつつ、タイ語の他動詞を分類した。主語の意味役割による3つのタイプ分け（動作主格タイプ、与格タイプ、道具格タイプ）の他、目的語の意味役割による下位分類も含め、かなり細かいタイプ分けを試みている。しかし Kullavanijaya 1974 自身も認めているように、これだけ細かく分

類しても、タイ語の他動詞の網羅的分類であるとは言い難い。もっと細かい分類素性を立てて、さらに細かく分類することも可能であろう。あるいは、無駄な分類素性を削ったり重複する分類素性を整理統合させたりもできるかもしれない。タイ語の文法体系（意味と形式の両面）において、Kullavanijaya 1974 の提示した他動詞の分類がどれだけ有意なものであるのか、本当に必要十分な分類であるのか、より広範かつ詳細な観点から検証されるべきであろう。

一方で Thepkanjana 1992 は、「直接目的語の生起が義務的かどうか」という基準を第一の分類基準としてタイ語の動詞を分類し、直接目的語をとり得ない自動詞カテゴリー（典型的自動詞）と直接目的語をとり得る他動詞カテゴリー（典型的他動詞、非典型的他動詞、典型的自・他動詞、非典型的自動詞）との間の連続性を追求した。直接目的語（動詞の直後に生起する名詞句）をとり得る動詞はすべて他動詞カテゴリーに入るため、Thepkanjana 1992 の他動詞カテゴリーには Kullavanijaya 1974 が他動詞とは認めていないものも含まれている。しかしその反面、Thepkanjana 1992 が挙げている動詞の具体例は少なく、挙げられていない動詞の中には、どのカテゴリーに当てはまるのかよくわからないもの¹¹がある。分類素性として使っている他動性因子の内容を再考する必要があるようだ。

筆者は、Kullavanijaya 1974 と同様、タイ語の動詞には必須項がないと考えるので、「典型的他動詞には直接目的語が義務的に生起する」という Thepkanjana 1992 の考えを支持しない。タイ語の動詞について「直接目的語の生起が義務的かどうか」を判断するとき、その判断は往々にして恣意的である。例えば、Thepkanjana 1992 が提示した「(2) 直接目的語が生起しないこ

¹¹ 直接目的語をとる動詞（他動詞）であるのに Thepkanjana 1992 が立てた他動詞カテゴリーのどのカテゴリーに入れるべきかよくわからない動詞の例として、先述のとおり、所有動詞「所有する มี」、道具格主語をとる他動詞「(釘が) 刺す ตำ」、与格主語をとる他動詞「見える เห็น」などを挙げることができる。

とを許す非典型的な他動詞」、「(3) 直接目的語が生起してもしなくてもよい典型的な自・他動詞」、「(4) 直接目的語が生起することを許す非典型的な自動詞（非典型的な他動詞）」という3つの動詞カテゴリーは、直接目的語をとれるかどうかという統語的な面において、さらには意味的な他動性の程度においても、それほど明確な差はなく、それぞれ定言的カテゴリーであるとは言い難い。特に、「(2) 非典型的他動詞タイプ」および「(4) 非典型的自動詞（非典型的他動詞）タイプ」と切り離れた別個のカテゴリーとして「(3) 典型的自・他動詞タイプ」を立てられるのかどうかについては、筆者は非常に懐疑的である。Thepkanjana 1992によれば、「(2) 非典型的他動詞タイプ」は [+2 participants, ± target, + volition, ± physical manipulation, ± obvious effect on the target] という特徴を持ち、「(3) 典型的自・他動詞タイプ」は [± 2 participants, - target, + volition, - physical manipulation, - obvious effect on the target] という特徴を持ち、「(4) 非典型的自動詞（非典型的他動詞）タイプ」は [± 2 participants, - target, - volition, - physical manipulation, - obvious effect on the target] という特徴を持っているという (cf. 表 1)。しかし仮にそうした特徴を持つ他動詞タイプがこのように3タイプ認められるとしても、タイ語の文法体系において、意志性の有無という点でしか区別できない「(3) 典型的自・他動詞タイプ」と「(4) 非典型的自動詞（非典型的他動詞）タイプ」をそれぞれ別個の動詞タイプとして区別する意義が果たしてあるのだろうか。

Thepkanjana 1992 がその冒頭で紹介しているとおり、“他動的な transitive” という言語学用語の語源はラテン語の“(ある空間を) 超える、あるいは横断する go over or across” という空間移動の意味を表す動詞 “transeo” である。したがって、“他動性 transitivity” の本質は「何かから何かへ何らかの影響力が移動すること、何らかの影響力が及ぼされること」であると考えられる。想定されるその影響力の源が意志を持った人間(行為者)であるかどうか(どのようにその影響力の源が想定される傾向があるのか) はそれぞれの言語共同体の文化的要因によって決まるものであろうと筆者は推測する。タイ語文

化で想定される無標の影響力の源は、英語文化で想定されるそれ(すなわち、知覚、認識、意志、目的、制御力、責任能力を持った能動的で主体的な人間)と同じかどうか、言い換えれば、Lakoff 1977 が提唱する他動性のプロトタイプの図式—他動性の理想的認知モデル (cf. Lakoff 1987) —は果たして人間文化全般に共通の普遍的なものであるのかどうか、慎重に見極める必要がある。言語類型論の見地から各言語の言語現象を丁寧に考察しなければならない。

直接目的語の生起が義務的かどうかということよりも、直接目的語の指示物が特定のなもの(話し手が特定のな実在物として認定して指示するもの)かどうかという区別のほうが、タイ語の他動詞の他動性の程度を計る物差しとしては有用であると筆者は考える。例えば、Thepkanjana 1992 が「(3) 典型的自・他動詞タイプ」に分類する動詞「(答えを) 熟考する ไตร่ตรอง、(お金で) 不正を行う ทจริต、(速いテンポで) 跳ねる เต้น」について考えてみると、これらの動詞の直接目的語¹²となり得る「答え、お金、速いテンポ」といった名詞句の指示物はすべて不特定のなもの(話し手が特定のな実在物として認定して指示することができないもの)であると言える。その点において、これらの動詞は、直接目的語の指示物が特定のなものであり得る「(2) 非典型的他動詞タイプ」に比べて、他動性が低いと言える。管見の限り、直接目的語の指示物が特定のなものかどうかを考慮してタイ語の他動詞の分類を行っている先行研究は見当たらない。

今後、タイ語における他動性の概念について、さらに考察を深めていきたいと考えている。その過程で、本稿の分析結果を活用できればよいと思う。

¹² Thepkanjana 1992 の説明によれば、「自・他動詞の直接目的語が表すものは、動詞が表す事象に本来的に参加するものではなく間接的に参加して、いわばその事象の範囲を特定するといえるもの」である。

〈参考文献〉

- Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson. 1980. Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56-2, 251-299.
- Indrambarya, Kitima. 1994. *Subcategorization of Verbs in Thai: A Lexicase Dependency Approach*. Ph.D. dissertation, University of Hawaii.
- Iwasaki, Shoichi, and Preeya Ingkaphirom. 2005. *A Reference Grammar of Thai*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kullavanijaya, Pranee. 1974. *Transitive Verbs in Thai*. Ph.D. dissertation, University of Hawaii.
- Lakoff, George. 1977. Linguistic gestalts. In Beach, Woodford et al. (eds.) *Papers from the 13th Regional Meeting, Chicago Linguistics Society, April 14-16, 1977*, 236-287.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- 峰岸真琴. 2007. 「孤立語の他動性と随意性」角田三枝・他（編）『他動性の通言語的研究』, 205-216. くろしお出版.
- メーターピスィット, タサニー. 2000. 「タイ語の受動態と使役態の現れ方と動詞の分類」『言語・地域文化研究』6, 59-79.
- Punyodyana, Tasaniya. 1976. *The Thai Verb in a Tagmemic Framework*. Ph.D. dissertation, Cornell University.
- 坂本比奈子. 1985. 「タイ語の動詞の下位分類について」『アジア・アフリカ言語文化研究』30, 177-192.
- Taylor, John R. 1989 (1995 2nd ed.). *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford: Oxford University Press.
- Thepkanjana, Kingkarn. 1992. Transitivity continuum in Thai. *Proceedings of the 3rd International Symposium on Language and Linguistics: Pan-Asiatic Linguistics*,

タイ語の他動性に関する先行研究：Kullavanijaya 1974と
Thepkanjana 1992の比較

Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand, January 8-10, 1992, Vol.1,
308-319. Bangkok: Publication Subcommittee of the Pan-Asiatic Linguistics
Symposium.

Thepkanjana, Kingkarn. 2000. Lexical causatives in Thai. *Constructions in
Cognitive Linguistics*. In Foolen, Ad and Frederike van der Leek (eds.), 259-281.
Amsterdam: John Benjamins.

Thepkanjana, Kingkarn. 2003. A cognitive account of the causative/inchoative
alternation in Thai. *Cognitive Linguistics and Non-Indo-European Languages*. In
Casad, Eugene H. and Gary B. Palmer (eds.), 267-274. Amsterdam: John
Benjamins.